

※本コメントは、複数の部門に対して総括して書かれたものであり、特定の部門に対して書かれたものではありません

コンクールの目的の一つとして、若いピアニストのみなさんにとって教育的な側面がなければならないという事務局の考えに強く賛同します。もちろん、若いピアニストのみなさんの演奏を直接聞くことができない状況において、十分に責任をもって自分の印象やアドバイスをお伝えすることは非常に難しく、ほとんど不可能に近いことです。ですから、今回はショパン in ASIA の全ての部門において当てはまるであろう一般的な事柄について私の考えを述べさせて頂きたいと思います。

今回審査をする中で、芸術的な個性が足りていない、あるいはまったく感じられないという印象を受けた演奏がいくつかありました。一方で、全ての音を正確に弾くことや、先生に言われたことを忠実に守ることに注力しすぎていると感じられる演奏もありました。残念ながら、自由で柔軟性があり、想像力に溢れる演奏はそれほど多くはありませんでした。正確ではあるものの、楽譜に書かれていることが機械的に再現されているだけだったり、律動的でメトロノームのようなテンポの演奏もありました。このような弾き方や音楽の理解の仕方では、若いピアニストの芸術的な個性、そして音楽的な想像力や音楽に対する深い理解力を伸ばすことができません。

日々の練習の仕方を見直してみましょ。メトロノームは重要な指針です（ですが、あくまでも指針にすぎないのです）。しかし、もしコンサートやレコーディングで、語るようなフレーズの代わりに、メトロノームの音が感じられたり聞こえてきたとしたら、それは完全な間違いです！楽譜に書かれている全ての音、休符、アクセントが聞こえてきたとしても、それらが曲を語るうえでどのような役割を担っているのかが理解されていないのです。そのような機械的な演奏は、特にショパンの作品のように深く語り掛けるような解釈が求められる作品にはそぐいません。

若いピアニストと一言で言っても、年代によってそれぞれの抱える問題は根本的に違うということはもちろん理解しています。しかし、技量のレベルが違うということはさておき、年代に関わらず、自然で創造的で自由な表現や、音楽を楽しんでいる姿が聴こえたり見えたりするとよいと思うのです！特に「自然な表現」ということを強調しておきたいと思います。人工的に外から得たものや、時に音楽の内容への理解の程度を示唆するようなわざとらしく大げさな身振り手振りや動きに基づくものであってはなりません。

もう一つよくある問題として、いわゆる「音楽を表現すること」と「情熱的な演奏」の違いをきちんと理解することが挙げられます。残念ながら、表現というものは速いテンポや強弱に密接に関係していると考えているように思われる若いピアニストの解釈にしばしば出会います！私の意見では、これは最も根本的な音楽における間違いや解釈上の誤解の1つです。音楽的な表現はテンポや強弱によって生み出されるものでなく、演奏者の精神、深い想像力、芸術的な個性から生み出されなければなりません。つまり、テンポや強弱の解釈というのは、単に必然的な想像力の結果でしかありません。

最後に、芸術的な想像力や、それを聴衆に伝えられる能力も大切です。ピアノ演奏におけるこれらの課題を理解するというのが、「よいピアニスト」と「想像力に溢れる素晴らしい芸術家」との違いを生み出します。若いピアニストのみなさんが、そのような音楽の理解や解釈上の問題を探し求め、それらに取り組みられるようお祈り申し上げます！

※本コメントは、複数の部門に対して総括して書かれたものであり、特定の部門に対して書かれたものではありません

自由に弾くことを恐れず、自分らしい解釈を表現してください。音楽を感じ、そして表現するために必要な想像力を鍛えましょ。曲のタイトルに注意を向け、それに基づいた解釈を組み立てましょ。コンチェルトを演奏するときには、ソリストとオーケストラ（または第2ピアノ）が表現、アーティキュレーション、強弱、ペダル、フレーズなど、色々な面で協力しなければなりません。また、フォルテであってもきつい音にならないように。体の動きと出てくる音は密接に結びついています。テクニックというのは、いつも音楽表現のために使

われなければなりません。強弱は、ニュアンスをつけて柔軟に弾き分けましょう。長いフレーズを感じて、大きな感情の線を描き出しましょう。

※本コメントは、複数の部門に対して総括して書かれたものであり、特定の部門に対して書かれたものではありません

子どもたちに早い段階で室内楽を学ばせることの重要性を感じました。たとえそれが易しい曲であっても、コンチェルトを弾くことで、他の楽器と一緒に弾くこと、他の人の演奏をよく聞くこと、拍子を意識することを学べます。

たくさんよいところがあったのですが、あえて言うならば、各パートが混ざってしまっていた演奏もあったので、ソロとセコンドの伴奏のバランスに注意を払いましょう。また、ペダルの踏み過ぎで音階を弾いているときに音が濁ってしまわないよう気を付けましょう。

しかし、みなさん総じてよい指導を受けていらっしゃり、また伴奏者と共演するための準備もしっかりとできていました。

ピアノ伴奏に乗って楽しく演奏されている方が多く、幼いながらしっかりした技術力があり、表現力も豊かでした。

コンチェルト部門に共通して言えることは、このコロナ禍にあって、2台のピアノで練習することも、録音をすることも大変なことだったと思います。どの参加者も素晴らしい環境を確保し、年末年始の時期にもかかわらず、最善を尽くされたことが、演奏からも動画からも伝わり、感動しました。今回はアジア大会も2台ピアノでの演奏だったので、少しテンポの変化や歌い回しに不自然さを感じたことが気になりました。室内楽やオーケストラとの共演だった場合は、もう少しわかりやすい音楽表現が必要になるかと思います。また、IからABまでの部門では、どうしてもセカンドピアノの力量で演奏の印象が変わるので、ソリストに集中して審査するのが難しかったです。

I部門は皆さん、アンサンブルを楽しんでおられて、とても良かったです。2台のバランス、そしてソリストの左右のバランス、ペダリングが難しいと感じました。

すばらしい演奏でした。きれいに音を鳴らし、メロディーの抑揚がなめらかに表現できている人がいて、びっくりしました。あと、セコンドの人の音もしっかりときき、音の対話ができるとよいと思いました。

- ・伴奏と良く合わせる事が出来ています。
- ・さらに芯のあるタッチを追求しましょう。
- ・曲のキャラクターを良く掴んで、多くの場合さらに楽しさを強調しましょう。
- ・デュナーミクを幅広く使いましょう。